

(別紙4)

#### 入学試験問題漏洩と不正入学事件

大阪大学で前代未聞の不祥事が起こった。

昭和46年2月中旬ある日の午後、私は庶務部長から部屋に呼ばれ、部屋に入って突然「警察から阪大の入試問題（英語）が漏れていると、総長に通報があった」と告げられ、突然頭から冷水を浴びた思いがした。43年度から45年度にまたがって漏れていたと言うことは、私が教務掛長をしていた時期と同じなので、一瞬言葉に詰まってしまった。

しばし瞑目して、その頃の入試事務全般に思いを巡らせてみたが、問題が漏れるような事務の手落ちには絶対に無い。問題は刑務所で印刷、問題の受取り、保管、試験場への搬送、どれを取っても自分が責任を持って十分監視をしていたし、保管庫の管理も万全を期していた。また教務掛は勿論のこと、応援の他掛の職員にも不審な点は一切見当たらない。

私は庶務部長に「入試事務は多くの人手を借りていますが、断言はできないけれど私の見るところでは、事務から漏れたということは絶対ありえません」と一応は答えた。

「明日警察官が、当時の担当者に事情を聴きたいと言っているので、千里阪急ホテルを予約してあるから君一人で会ってくれ。またこのことは、総長、事務局長と私以外は誰も知らない。入試準備が始まっているので、庶務課長にも黙っているように」と釘をさされた。

その頃は2月1日から入学願書を受付け入試の事務が始まっていた。これは自分一人で何とかしなければ漏れては大変なことになると、一人であれこれと思いを巡らせ「漏れたという問題のコピーと保管してある問題紙を照合して見ることが先決だ」こう思い付いて明日警察官がくる時に、漏れた問題紙のコピーを必ず持参するように連絡してもらった。

私は学術掛長に異動していたので、教務掛長に庶務部長から頼まれたと行って、鍵を借り明日持参する年度の英語問題紙を倉庫から持ちだした。その夜はどう鑑定すればよいかとその方法を考えながら、過去に某国立大学の教務課職員が問題を漏らしたことがあって、学長までが辞任されたと聞いていたので、まさか本学でそのようなことは？と気掛りになってなかなか寝付けなかった。

翌朝は9時にホテルのロビーでそれらしい私服刑事二人に会い、予約してある一室で向かい合った。西成警察署の殺人捜査本部の刑事であった。1月31日に起きた殺人事件から、ひよんな駒が飛び出して入試問題の漏洩が発覚し、大阪市立大学の問題も漏れているとのことであった。

早速両問題紙を照合してみると内容は全く同様である。しかしコピーに何か違いはないかと落ち着いて注視してみるとその違いが分かり、急に涙が出そうになるほどに安心した。

コピーされた問題紙は本物より幅広く、本物をコピーしたものであれば、製本の裁断面の線が薄く付くがそれが無く、綴じたホッチキスの穴も小さいが付いていない。

当時のコピー機は今ほど高度ではなかったが、それでも鑑定するには充分であった、すぐに具体的に相違点を説明して、「これは大学内から漏れた物ではありません」声が多少上ずってはいたが確信を持ってそう断言した。刑事も納得してくれて穏やかな言葉使いに変わり、それからは入試のシステム等について交互に質問があり、昼食をとってからは気持ちも落ち着いて、質問には余裕をもって説明できた。

事情聴取が終わったのは午後5時頃であった。二人の刑事と別れて早速庶務部長に電話を入れて、「問題紙は学内から漏れた物ではありませんでした、詳細は大学に帰ってからします」と、それだけ言うのに嬉しさが声が震えた。「ご苦労さん、もう帰って休みなさい」の一言でいっぺんに気が休まった。

一応は安心できたので、それからはポーカークフェースに徹し通すことができた。

さてその後がまた色々あって、捜査本部から庶務部長を通して、度々入試システムの参考資料の要請があり、そのつど庶務部長に頼まれたと断って、教務掛のロッカーから書類を持ち出し、会議室で提出資料を作成した。そして出来上がった資料は庶務部長に目を通してもらって、翌日指定された場所に持参した。

資料の受取りと説明の聞き役は、捜査本部長（府警捜査第一課課長補佐の警部）で、手の空いている私が来たと、微笑を浮かべた貫録のある方であった。時々会う場所は案外人目に付きにくい、ロイヤルホテルのロビーでコーヒーを飲みながら、さり気ない雑談の様子で話すのである。時折大学に資料を頼んでいるからと、捜査の進行を話してもらえた。

また捜査が一段落した頃には、大きな紙に図示表記された、全てを計画した主犯者・共犯者・仲介者、それに医・歯学部を受験した者・合格者等約30数名の名を書いたものを広げてさらっと見せてもらった。私はあまりの多数なので茫然と眺めるだけであった。でもまだ捜査内偵続行中とのことなので、仲介者の中に本学の関係者がいるのかどうか、気掛かりで心配でもあった。

入学試験が終るまで、この捜査本部の発表は極力抑えられていたが、3月5日試験終了と同時に西成警察署で記者発表があって、夕刊の新聞・テレビ放送で一斉に報道された。学内は勿論のこと世間もこの事件で大騒ぎになった。

私は試験終了を待って庶務課長に事情を話したが、既に知っておられたようであり安心した。

その後は連日トップ記事で次々と事件内容が報道され、事件の大要が明らかになった。

（大阪刑務所内印刷工場で印刷責任者の模範囚が抜き取り、破れたボールに入れて塀越しに外へ投げ、主犯者（元受刑者）が受け取る。犯行二回目からは看守が仲介して面接にきた主犯（元受刑者）に渡していた。この主犯が医学部受験生の親に売り付けホテルで缶詰めの特訓をした。またその仲介者には某市の教育委員もいたことには驚いた）

捜査書類が出来上がった時点で、検察庁に提出するために確認が欲しいとのことで、庶務課長に同行して挨拶に出向いたが、その時に親子丼を捜査本部長と一緒に馳走になった。

またその後、大阪検察庁から送検された書類を見てほしいとのことで、庶務課長に同行した。これらのことは私には非常に強い印象深いものとなった。

この事件は最終的に警察から知らせてきた受験者28名のうち、合格者10名（医学部8、歯学部1、法学部1）について、不正入学調査委員会で調査事実確認を行った上で、それぞれの教授会が「入学取り消し」の処分を行った。また医学部ではこの取り消しの欠員分を、次点のため他大学に入学していた5人に対して、医学部専門課程1年に編入学させることにして終結した。

この様な大事件が私の教務掛長在職中に起こったとは、正に42歳の本厄大凶であった。しかし本学関係者に関与した者が全くなかったことは、不幸中の幸であり私はこのことで厄抜けができたと思った。

#### （追記）

この事件が発覚する以前の夏頃に、某市の新聞記者が医学部の入試委員のところに来て、岡山県下で阪大の入試に黒いウワサが立って、県下の高校から医学部を受験して合格した女子生徒が、高校の成績があまりよくないのに、合格しているは不審だと大騒ぎになっているので、替え玉かどうか調べて欲しいと話をもち込んできた。

記者が持ってきた本人の筆跡・高校試験答案と本学入学願書・入試答案等を、入試委員と一緒に保管場所であった適塾で、綿密に照合したが間違いがない。最後は法医学教室で鑑定までされたが、本人が書いた答案には相違なしとのことであった。

（替え玉どころか、問題が刑務所から漏れていたとは、神のみぞ知るであった。）

#### （補足）

#### 入学試験の改善

この事件があってから学内では、入学試験制度委員会において、入試制度の在り方全般について検討が進められた。入試問題の印刷は刑務所をやめて、より厳格な国の印刷施設に替えられた。

全国共通一次試験の採用と二次試験の科目軽減等について、改善の方向も打ち出された。

また文部省では大学の入学試験は各大学の任意に委ねていたが、入学試験の重要性を考慮され、47年4月全国で初めて大阪大学に、入試事務担当の組織として入学主幹が置かれた。

入学願書は郵送によって各学部で受理する。問題紙は試験前日に事務局から各学部へ搬送する。合格者の発表は各学部で行うことになった。

その後文部省では全国共通一次学力試験を試行されることになり、各大学が協力することになって、52年度53年度の2回は教養部の教室と府立高等学校の教室を借りて12月下旬に、2日にわたって試行テストが実施された。

この試行テストの成果を踏まえて、大阪大学でも54年度から共通一次試験の成績を学力試験成績に加味されることになった。

以上